

司馬遼太郎
全講演

[1]

1964-1974

朝日文庫

し ばりようた ろうぜん こうえん
司馬遼太郎全講演 [1]
1964-1974

朝日文庫

2003年10月30日 第1刷発行

著 者 司馬遼太郎

発行者 柴野次郎

発行所 朝日新聞社

〒104-8011 東京都中央区築地5-3-2

電話 03 (3545) 0131 (代表)

編集＝書籍編集部 販売＝出版販売部

振替 00190-0-155414

印刷製本 凸版印刷株式会社

©Midori Fukuda 2000

Printed in Japan

定価はカバーに表示してあります

ISBN4-02-264314-5

司馬遼太郎全講演「1」

江苏工业学院图书馆

1964—1974

司馬遼太郎
藏書章

朝日文庫

本書は朝日新聞社より刊行された『司馬遼太郎
全講演 第1巻』（二〇〇〇年七月刊）中、一九
六四年～一九七四年の講演をまとめたものです。

目 次

一九六四年—一九六八年

死について考えたこと 11

法然と親鸞 25

歴史小説家の視点 55

大阪商法の限界 79

一九六九年—一九七一年

学生運動と酪酊体質 97

うその思想 112

松陰と河井継之助の死 129

松陰の優しさ 163

河井継之助を生んだ長岡 197

大化の改新と儒教と汚職 227

司馬さんの控え室① 長安から台北へ

一九七二年——一九七四年

薩摩人の日露戦争 247

民族の原形(一)——儒教 287

民族の原形(二)——毛沢東 303

民族の原形(三)——日本の将来 320

司馬さんの控え室② 井上靖さんと「組合」 336

天皇について 338

司馬さんの控え室③ 司馬さんと雅子妃 351

国盗り齋藤道三 353

幕末の三藩 374

解説 「思想嫌い」の思想——関川夏央 397

司馬遼太郎全講演

[1]

1
9
6
4
|
1
9
7
4

一九六四年（昭和三十九）——一九六八年（昭和四十三）

【一九六四年—一九六八年】

第十八回オリンピック東京大会開催（六四年十月）

米軍機が北ベトナム空爆を開始（六五年二月）

中国で「文化大革命」はじまる（六六年五月）

政界に「黒い霧」事件、衆議院解散（六六年十二月）

羽田事件（第一次）。以後、学生運動が活発化（六七年十月）

ソ連・東欧五力国軍がチェコに侵入（六八年八月）

【司馬遼太郎四一歳—四五歳】

大阪市内から大阪府布施市（現・東大阪市）中小阪に転居（六四年三月）

菊池寛賞受賞（六六年十月）

●主な著書

『燃えよ剣』（六四年三月）

『新選組血風録』（六四年四月）

『尻啖え孫市』（六四年十二月）

『功名が辻（全二巻）』（六五年六月—七月）

『国盗り物語（全四巻）』（六五年十一月—六六年七月）

『関ヶ原（全三巻）』（六六年十月—十一月）

『最後の将軍—徳川慶喜—』（六七年三月）

『殉死』（六七年十一月）

『故郷忘じがたく候』（六八年十月）

『峠（全二巻）』（六八年十月）

死について考えたこと

今日はお暑いところをお集まりいただきました。私は怠け者ですから、とても暑い日に四天王寺まで来る気にはなれません。皆さん大変だと思い、それなのに、あまり役に立たない話になるなと思いつつやってきました。

親鸞聖人しんらんしょうにんの話からいたします。

親鸞聖人の話を聞きに、たくさんの方が諸国から集まってきました。

鎌倉時代にして、旅行は困難でした。宿屋が整備されたのは徳川時代になってからです。この時代に宿屋はほとんどなかったと思います。

強盗も心配だし、飢えもしのがなくてはなりません。そんな悪条件のなか、必死になつて親鸞聖人のもとにやってくるわけです。

人生とは何だろうか。仏法とは何だろうか。

ところで親鸞聖人の場合、お寺の住職になる資格のなかった人ですね。

親鸞聖人は、お寺の住職になる国家試験を受けたのか受けないのか、落第したのか、とにかくそういう資格はありません。ただ頭を丸めて、坊さんらしいたたずまいをしているだけで、厳密に言えば、もぐりであります。

当時のお坊さんは、たいへん位の高いものでありました。私だって頭を丸めて衣を着れば、なんとなく坊さんに見えないこともないでしょうが、そういう者は寺を持てません。

奈良の東大寺に戒壇院という、いいたたずまいのお堂があります。なかに四天王が納まつていて、その彫刻は世界的なものですね。

戒壇院とは僧侶になるための授戒の儀式を行うところです。奈良時代、ここで戒を授けられると、国家試験に通ったことになり、れっきとしたお坊さんになれました。

少し時代が下って平安時代になりますと、比叡山にも戒壇が設けられました。

なかなか難しい試験でしたから、お坊さんになることのできる人は優秀ですし、なっただけでも尊いものでした。

さいぎょう西行法師などは頭を丸め、杖について諸国を歩き、歌をつくって一生を過ごした。西行という坊さんめかした名前がついていて、たしかにお坊さんではありませんが、厳密には資格はない。

お師匠さんのほうねんしやうにん法然上人はたぶんパスなさったと思うのですが、親鸞聖人は国家試験を受ける前に比叡山を下りてしまったようですね。

その親鸞聖人が町や村で庵を結んでひとり修行をしていらっしやいます。

いかにも人生を深く考えているようで、あの人に頼れば仏法が得られる、あるいは悟りが開かれる、浄土に参ることができると期待された。ほうぼうから人々が集まってきたのですが、もつとも、親鸞聖人はそんなに甘い人ではありません。

親鸞聖人の絵像が西本願寺にも東本願寺にも残っていますが、三船敏郎よりも恐ろしい顔をしています。仏法を究めれば、ああいった顔になるのかと思わせる。

余人をはねつける厳しさがあつたようですね。こんなことを言ったのではないかと想像します。

「おまえさんたち、十余カ国の境を越え、わざわざ何をしに来られたか。仏法を得るためならば、ほかへ行ってもらいたい。私はここで仏法とはこうだと思つて、考えるところに行つてはいるけれども、それは自分自身だけのためなのだ。人にまで教えるようなものは何も持ち合わせていない。自分だけが救われようと思つているだけだ」
 厳しいですね。

「南無阿弥陀仏を唱えていれば極楽往生できる。自分はそう信じていて、それはうそではあるまいと思う。それがうそならば、それを教えてくれたお師匠様の法然上人がうそ

をついたことになる。

だんだんたぐっていけば、お釈迦様がうそをついたことになる。そんなことはありえないことだ。ただ信じて、ここで暮らしているだけである。自分の人生観、仏法観、あるいは信心というものは、自分というたった一人を救うためのもので、人に教えるものではない。やつと自分がかろうじて救われようとしているときなのだ。邪魔をするな」
 そう言いそうな顔であります。

「親鸞は一人の弟子も持ち候そうらわず」

ということですね。

突きつめていけば、仏法とは人のためではなくて、自分のためにするものだということになります。

もちろん、私は今日、仏法について話すというつもりはありません。まず親鸞聖人を持ち出して、偉そうな断り書きをさせていただきました。親鸞聖人でしたら、効き目がありそうですから。

いまわれわれは四天王寺にあります。

大阪の天王寺区の上町台地うえまちにありますね。聖徳太子が開かれた、日本でも最大の名刹めいさつのひとつです。大阪でいま地震があっても、ここなら大丈夫そんな感じですよ。皆さん、安心されています。いま三百人の方に私の話を聞いていただいています。四天王寺に

いるということに安心されている。

でも、これが南極や火星だったら、落ち着かなくて不安ですね。どこかわからない場所だったら嫌でしょう。とても私の話どころではありません。

仏法とは仏の教えのことですが、いまおまえさんはどこにいますと教えてくれる一枚の地図だと思っています。

地図がなかったら、寂しいですよ。

私には悪い癖がありました、どこに行くにも地図を持っていきます。

知らない土地に行って、土地の人に地図をのぞき込んでもらい、いろいろ教えてもらって安心します。ああ、あれが畝傍山うねびやまかと、安心する。

われわれは自分の位置関係をはっきり把握しながら歩くものです。人生にも、一枚の地図が必要です。

仏法という地図は、世界でもいちばん精巧で、正しい地図だと私は聞いています。もし、仏法という地図が私に与えられるならば、仏法に参入したいとも思います。

戦時中は信心を得たと思いました

しかし、どうも私は迷いが多いのです。地図一枚を信じるのがなかなかできません。